

國學院大學學術情報リポジトリ

日本神話はどう読まれたか：
一九世紀の神話学と翻訳を中心に

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 國學院大學 公開日: 2024-03-13 キーワード (Ja): 神話学, 日本神話, 翻訳, 比較, 日本学 キーワード (En): 作成者: 平藤, 喜久子, Hirafuji, Kikuko メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000180

日本神話はどう読まれたか

— 一九世紀の神話学と翻訳を中心に —

平藤喜久子

一、はじめに

愛する妻を失った夫が、妻を連れ戻そうと黄泉の国へ行く。しかし、課せられた禁を犯してしまったため、連れ戻すことに失敗。二人は永遠に別れることになる。これはギリシヤ神話のオルフェウスの話でもあり、日本神話のイザナキの神話でもある。似ていることに気がつくのは、当然のことながらギリシヤ神話を知っていて、日本神話を知っているからだ。ほかの地域の神話も知れば、オセアニア、南北アメリカ大陸にも同じよう

な話があることや、妻を連れ戻しに行って失敗する場合もあれば、成功する場合もあること。せっかく迎えにいったのに、帰りがらない者もいることなどがわかり、そうした数ある神話（オルフェウス型と呼ばれる）のなかに日本の神話を置き、類似について考えていくことができる。

近代的な意味での神話研究、すなわち神話学は一九世紀にはじまる。日本神話についていうと、日本では一八九九年に高山樗牛（林次郎）が「古事記神代巻における神話及歴史」を發表し、姉崎正治、高木敏雄のあいだで「スサノヲ論争」と呼ばれる論争を展開したことを起点とする。そのとき彼らはギリシヤ

神話やインドのヴェーダ神話などと比較をしながら日本神話のルーツやあるべき研究の方法を論じていた。^①

では、海外における日本神話の神話学的研究はどうだったのだろうか。一九世紀は、神話学、宗教学の草創期である。また、日本の情報が江戸期以上に開かれていった時代でもあり、そのなかで日本神話も西欧の研究者たちにアクセス可能なものになっていく。なかでも翻訳の果たした役割は大きいといえる。

一九世紀、バジル・ホール・チェンバレン (Basil Hall Chamberlain, 一八五〇—一九三五) は古事記を英訳し、W・G・アストン (William George Aston, 一八四一—一九一一) は日本書紀を英訳した。レオン・ド・ロニ (Leon Lucien Prunel de Rosny, 一八三七—一九一四) も古事記、日本書紀の一部のフランス語訳に取り組んだ。少し遅れてカール・フロレンツ (Karl Adolf Florenz, 一八六五—一九三九) は一九〇一年に日本書紀のドイツ語訳を発表した。彼らが翻訳という困難な仕事に取り組んだ背景には、その時代の神話学、宗教学との関わりがあったことは明らかだ。また、彼らの翻訳により、神話学者たちは日本神話を比較研究に組み込んでいくことが可能となった。

本稿では、一九世紀から二〇世紀にかけて、海外の神話学者

また翻訳者たちが、どう日本の神話と向き合い、どのような地域の神話とどう比較をしていたのかを明らかにしたい。

二、翻訳以前の日本神話研究

一八世紀から一九世紀にかけて、ヨーロッパでは「未開」と「古代」をめぐる研究が盛んとなっていた。大航海時代以降、アフリカ大陸やアジア、南北アメリカ大陸、そしてオセアニア地域が「未開」として見いだされ、その地から報告される神話、儀礼、習俗は、キリスト教を相対化させ、宗教の起源についての研究を促すことになる。また、エジプトやメソポタミアの発掘や文字の解読も古代宗教の姿を描き出す欲求を刺激した。まさに宗教学、神話学、人類学の草創期である。^③

この時期を代表する研究者の一人にタイラー (Edward Burnett Tylor, 一八三二—一九一七) がいる。タイラーは、一八五五年にメキシコ、キューバ旅行に出かけ、その体験をきっかけに人類学者としての歩みをはじめた。そして一八七一年に『原始文化—神話・哲学・宗教・言語・芸能・風習に関する研究』を刊行する。この中で論じられた宗教の起源論が、有名なアニミズム論である。^④ タイラーはこの代表作のなかでも日本に

ついでケンベルの『日本誌』などを参考にして書いているが、⁽⁵⁾アニミズムと関わるような言葉や現象のことに限られており、神話については触れられていない。

タイラーが日本の神話について本格的に論じたのは、一八七六年の王立人類学研究所 (The Royal Anthropological Institute of Great Britain and Ireland) における「Remarks on Japanese Mythology」と題された講演である。⁽⁶⁾大林太良によって、海外における近代的な日本神話研究の開始であると位置づけられている。⁽⁷⁾すでに大林によっても紹介されているが、あらためて内容を確認しておきたい。

タイラーは、古事記について「私の知る限りどのヨーロッパの言語でもアクセスできない」⁽⁸⁾ものであると述べ、日本からの留学生の一人であった馬場辰猪に古事記の冒頭部を英訳してもらい、そのほかシーボルトやクラプロートも参照して論じている。彼は日本の神話伝説に三つの要素があるとし、その一つは、仏教的なもの、もう一つは日本書紀の冒頭のように、中国の影響が色濃いもので、それらを排除して残ったものが日本の層だとした。その層は自然神話 (Nature Myth) であるという。

彼が研究対象とするのはこの三つめの部分である。はじめに取り上げているのはヒルコ神話である。ヒルコが葦船で流され

たという話について、子供の神や英雄が流されるという話は、多くの民族でみられるもので、それが日本神話にもあることは注目されると述べる。また、スサノオについて、日本人の研究者が認識していないとしても、あきらかに風の神であると述べている。一八九九年に高山樗牛を皮切りに日本で最初に起こった神話学の議論は、スサノオを自然神話学的立場から嵐の神と解釈することの是非をめぐるものであった。⁽⁹⁾大林も着目している通り、それよりも二〇年以上前にスサノオについての自然神話学的解釈がすでにタイラーによって提示されていたことは、日本神話の研究史として押さえておきたい点である。

引き続きアマテラスの天の岩屋の神話やヤマタノオロチ退治の神話が紹介され、天の岩屋神話については、嵐によって太陽が隠れる話、またスサノオのヤマタノオロチ退治については、風と洪水の話であると述べる。

そしてタイラーがとりわけ興味深い観念、習俗として取り上げたのが、「ヨモツヘグイ」である。イザナキがイザナミを連れ戻すために黄泉の国を訪れたとき、イザナミは「あなたが来るのが遅かったために、ヨモツヘグイをってしまった」と述べる。つまり、黄泉の国の食べ物を食べってしまったために、黄泉の国から戻れないというのだ。この神話についてタイラーは、

ニュージールランドの神話と顕著な類似を示すと指摘している。

このあとにつづくデイスカッションでは、出席者からヨモツヘグイが、ギリシャ神話のペルセポネが冥界のザクロを食べてしまったために地上に戻れなくなった話と似るのではないかといった指摘や、妖精の食べ物を食べると普通の人間に戻れなくなるという話があることなども紹介された。ヒルコについても、ヘブライ語聖書でモーセが葦船で流される話との類似に言及があり、出席者たちの関心も高かったことがうかがえる。

このデイスカッションのなかでタイラーは、ヨモツヘグイとヒルコについては神話が似ていることよりも、広い地域で見られたかつての慣習、習俗が神話に取り入れられた可能性のほうが高いと述べ、ギリシャ神話よりはニュージールランドの神話との関係に注意すべきであるとしている。

タイラーは、スサノオを風の神と解し、天の岩屋の神話を嵐によって太陽が隠れる話であるとす。ヤマタノオロチ退治も嵐と洪水の神話とするなど、神話を自然現象から説明しようとする自然神話学の立場がみられる。しかしそれだけではなく、ヨモツヘグイの理解に顕著であるように古い習俗との関わりを重視していることがわかる。日本神話の前半部についてのみの研究ではあるが、当時の神話学の方法を援用しており、その後

の日本神話研究の先駆的なものであったことが確認できる。

チェンバレンやアストンによる記紀の翻訳が出る以前の研究としては、ドイツの民族学者アドルフ・バステイアン (Adolf Bastian, 1826-1905) のものも挙げる事ができる。彼は、一八五一年から船医として南米やオセアニア、インド、中国など世界各地を周り、さまざまな民族文化の調査を行い、その収集物によってベルリン民族学博物館の設立に寄与した人物だ。

タイラーも人類学の父と呼ばれるが、バステイアンもまたドイツ民族学の父と呼ばれている。彼は、人類の精神には統一的部分 (‘Elementargedanken’ 原質思念、原質観念) があると考へ、さまざまな習俗や神話は、その基本からの文化の進化によって生み出されていくと想定した。このようなバステイアンの考え方について、神話学者のジョーゼフ・キャンベルは、神話学にとつて重要な概念であるユングの「元型」に影響を与えたと述べている。¹⁰⁾ 「元型」とは、ユングが夢や神話の中に現れてくるイメージやモチーフを生み出す要素としたもので、ユングの心理学、神話学にとつて中核的な概念であった。

バステイアンは、一八六九年に *Reisen Im Indischen Archipel, Singapore, Batavia, Manila Und Japan* という東洋の旅行記を刊行し、このなかで日本の文化、宗教などについて詳細に述べ

ている¹¹⁾。そのなかに神話に関する記述もあるが、内容について比較をしたり検討をしたりということはない。

彼が日本の神話を研究のなかで取り上げるのは、一八八一年の *Die heilige Sage der Polynesier: Kosmogonie und Theologie* というポリネシアの宗教に関する研究である¹²⁾。長崎の出島で商館長を務めたイサーク・ティチングは、神武天皇以来の日本の歴史を記した『日本王代一覽』をオランダ語に訳した。ティチングの死後、ユリウス・ハインリヒ・クラブロートは、この翻訳をもとにさらにフランス語訳をし、日本神話についての補注を加えて出版をした。¹³⁾ *Nippon o dai tsi ran ou Annuaire des empereurs du Japon* と題され、一八三四年に刊行されている¹⁴⁾。バステイアンは、この資料を参照し、日本神話を紹介しながらハワイの神話との比較を行っていく。たとえばイザナキとイザナミが柱の周りを互いに逆に回って出会ったところで結ばれる話を、インドネシアのミナハサの伝説のようだと言ったり、イザナミが山川草木を生む話を、ポリネシアのタンガロアの妻のようだと言ったり、山幸彦がなくなった海幸彦の釣り針を探しに海の世界に行つてトヨタマビメと結婚をした話を、ハワイの天空神ワケアと女神との結婚の話と比較したりしている。

日本の神話を紹介しながら、ポリネシアの神話と似ている部

分を指摘しているのみで、大林も「極めて断片的であり、思いつき程度のものである」と述べているが、本格的な翻訳がないなかで、のちに南方の神話との比較を本格的に論じる松本信広の研究とも重なる論点も出されていることは驚きである。バステイアンの研究は、日本神話と南方神話の比較研究史のコンテクストに組み込む必要があると考える。

三、翻訳の登場と日本神話研究

一九世紀、タイラーと並んで草創期の神話学、宗教学の中心にいたのがマックス・ミュラー (Friedrich Max Müller, 一八二三～一九〇〇) であった。彼は、比較言語学の影響を受け、インド・ヨーロッパ語族の神名の語源を「比較」という方法で探求していた。彼は、神話とは自然現象を表現していた言葉が、次第にもとの意味が忘れられ、誤解されていくなかで発生したとする「言語の疾病」説を唱えていた。そんな彼の業績のなかに、一八七九年から刊行がはじまった *Sacred Books of the East* (『東方聖典集』) がある。仏教、道教、イスラーム、ジャイナ教などアジアの諸宗教の聖典の英訳を刊行したものである。神話学、宗教学の父とも呼ばれる彼が、翻訳を通し学問の

黎明期に基礎的な研究資料の整備を行ったことは大きな意義を持つ。

*Sacred Books of the East*に古事記は入っていないが、マックス・ミュラーは古事記にも関心を寄せていたようだ。すでに他所で論じたので簡単に触れるが、一八八二年に古事記の英訳を刊行するチェンバレンは、一八八〇年(明治一三)に目の病気のため海軍兵学校を休職してイギリスに一時帰国していた。その際、オックスフォード大学のマックス・ミュラーのもとに滞在し、古事記の英訳に取り組んでいたようである。どういった関係にあったのか、二人の間に交わされた手紙が未公開であることもあって詳細は不明だが、チェンバレンの古事記英訳という仕事の裏に、アジアの諸宗教の聖典を訳し、刊行していたマックス・ミュラーの影響があったことは明らかであろう。

タイラーやバステイアン、そしてマックス・ミュラーも日本の神話に関心を寄せるなか、古事記や日本書紀の日本語からの直接の翻訳が行われる。取り組んだのは、一八八二年に古事記の英訳を行ったチェンバレン、同年に古事記の一部を、一八八四年に日本書紀の一部をフランス語に訳したレオン・ドロニ、一八九六年に日本書紀を英訳したW・G・アストン、一九〇一年に日本書紀のドイツ語訳を行ったカール・フローレ

ンツである。このうちレオン・ドロニは独特な翻訳を行った。詳しくは別稿で述べたが、古事記を平田篤胤の『神字日文伝』を参照し、神字(ハングル)やデーヴァナーガリー文字で訓じするなど独創的なものとなっている。その一方で訳や注は本居宣長を参照したもので、この時代の神話学との関わりをうかがい知ることができないため、本稿では取り上げないこととした。

ここからは一八八〇年代以降の翻訳者たちとその翻訳を活用した研究者の神話研究を検討してみたい。

① チェンバレン

チェンバレンは一八八二年に雑誌 *Transactions of the Asiatic Society of Japan* に *Kojiki: Records of Ancient Matters* を発表する。上中下三巻からなる古事記の全訳である。彼は冒頭に長大な *Translator's Introduction* を付し、そこで翻訳の目的や文体、解釈、訓読のことなど広い観点から古事記、そして古代日本語の研究について詳述している。

それによれば彼の古事記翻訳の目的は、古代日本の習慣や伝統、思考などを明らかにし、英訳することによってヨーロッパの研究者の研究に寄与することにあるという¹⁷⁾。神話学、宗教学が盛んになるなか、日本学者としてアカデミズムに貢献したい

という思いがうかがえる。神話学という点では、翻訳の背景にマックス・ミュラーの存在があったことが指摘できるが、本書におけるマックス・ミュラーの存在は希薄だ。Translator's Introductionで日本神話についての研究方法を論じる際に、「イギリスで今とても人気な'solar' methodで解釈されるべきか、あるいは歴史が多かれ少なかれ残されているものとして見るべきか、あるいは後世の聖職者たちによる作為として拒否するか、専門家の助けが必要だ」と述べる⁽¹⁸⁾。この'solar' methodとはもちろんマックス・ミュラーの太陽の運行を中心とした自然神話学的研究方法のことを指す。'disease of language' (言語の疾病) 説についても取り上げられているが、「この病は誰もがかかるものではない」と断じている⁽¹⁹⁾。日本語の名詞には性がないことなどを指摘し、日本にとってこの考えが適用できないのではないかと考えているようだ。そして、ヤマトタケルの伝説を太陽神話として考えることもできないが、たとえ他地域で大きな成果を上げている方法であっても、日本の伝説に適用する際にはとりわけ注意が必要だと述べる⁽²⁰⁾。マックス・ミュラーの立場、方法を日本神話に適用することにはきわめて懐疑的だったようだ。

では、チェンバレンは日本神話をどの地域の神話と比較した

のであろうか。彼の古事記の翻訳に付せられた膨大な注は、ほぼ語注であり、神話の内容についてのコメントはほとんどない。

他の地域の神話への言及は、Translator's Introductionのなかに若干見ることができる。たとえば、日本神話の概要を説明するなかで、イザナキがイザナミを連れ戻しに黄泉の国へ出かける話はギリシャ神話の「オルフェウスのようだ」と語られる⁽²¹⁾。また、日本の神概念について、「さ蠅なす」と集合的に表現されるような神々もいるが「spirit」というものではなく、ギリシャの神々と同じように、「より優れた人間」ととらえられているとし、人間的な特質を持つ神であると考えている⁽²²⁾。この解釈は、二〇一四年に刊行されたギユスターヴ・ヘルトによる古事記の新しい英訳で、神をspiritと訳していることと対照的である。たとえばヘルトは、イザナキであればthe spirit He Who Beckonedと訳す⁽²³⁾。ギリシャ神話の神は英語でも通常spiritとは訳されないことを考えると、チェンバレンとはまったく異なる神解釈をしていることがわかる。ヘルトの新しい英訳は、チェンバレンに対する異議であるともいえよう。

このようにチェンバレンは日本の神話にギリシャ神話と共通する点をわずかながら見いだしているが、それは日本神話の成り立ちと関わるなどと考えているわけではない。チェンバレン

が影響関係を想定して日本神話との関わりを指摘したのは中国の神話である。中国の神話の影響は多くはないが明白だとし、イザナキの目から太陽の神と月の神が生まれた話は中国の盤古神話からほとんど変わっていないと指摘する。またイザナキが黄泉の国から逃げるときに桃の実を投げて黄泉軍から逃げる話も、中国に起源を持つという。そして高天原にいる服織女、そこを流れる天の川も中国に対応するものがある。神話に登場する鳴鏑も中国からきたものだ。このような例はほかにも多く見いだすことができる⁽²⁶⁾とした。

神話だけでなくチェンバレンは仏教と朝鮮のことなどにも言及し、古代日本の研究がまだまだ途上にあるものの、日本神話がアルタイ語系の心性 (Altaiic mind) を残すもつとも古いものであることを忘れてはならないと述べる⁽²⁷⁾。唐突に述べられる「Altaiic mindを残す最古の神話」という日本神話への価値付けは、一八八六年から東京帝国大学の博言学 (言語学) の初代教授として日本語と朝鮮語、アイヌ語、琉球語などを研究することになるチェンバレンの関心が、神話そのものよりも言葉にあったことを示しているのかもしれない。そのように考えると、神話についての比較や解釈がほとんどなく、語釈に注力した翻訳であることにも納得がいく。

② アンドリユー・ラング

マックス・ミュラーは、先述のように、神話を太陽の動きを中心とする自然現象から解釈する立場に立っていた。この自然神話学派はまさに一世を風靡した研究方法であったが、あまりに強引に自然現象に結びつける例もあり、批判も受けるようになっていた。なかでも厳しい批判を展開していたのが民俗学者で童話作家としても知られるアンドリユー・ラング (Andrew Lang, 一八四四～一九二二) である。ラングは、タイラーに近い立場にあり、神話をいわゆる「未開」の習慣、習俗などとの関わりから理解しようとしていた。このラングもまた日本に関心を寄せていた一人である。

一八八四年に刊行された *Custom and Myth* をみると、イザナキの黄泉の国訪問の神話を取り上げられており、イザナキがヨモツシコメから逃走する際に、髪飾りなどを投げる話について、ギリシャ、イタリア、ロシア、ゲール、ズールー、フィンランド、サモアなど特定の民族を越えて広く見られる話であると述べている。どうやら一八八二年に刊行されたばかりのチェンバレンの古事記を参照していたことがうかがえる⁽²⁸⁾。つづいてラングは一八八七年に、二巻からなる *Myth, ritual and religion* を刊行している。このなかでは、ド・シヤランセ

イ (Hyacinthe de Charancey, 一八三二—一九一六) の研究⁽²⁸⁾を参照しながら、島が英雄によって釣り上げられる話について、日本、トンガ、タヒチ、ニューギニアランドに見られる話として⁽²⁹⁾。どの話をさしているのかは不明だが、いわゆる島釣り型の神話というといザナキといザナミがアメノヌボコを使つてオノココ島を作る話があるので、そのことをいつているのかもしれない。また、トーテミズムと神話についての議論のなかで、古代ギリシャで動物崇拜があることを指摘し、アポロ・スミンテウス神殿ではネズミが信仰されていたと述べ、日本の豊穰の神と同じように足下にネズミが描かれると指摘する。この日本の豊穰の神とはオオクニヌシ(＝大黒天)のことであろう⁽³⁰⁾。このほか、エジプト神話を分析するなかで、ラーの神話に呪的逃走譚の要素があるが、それはスコットランドやゲール、ズールー、ロシア、サモアそして日本にもあると述べられている⁽³¹⁾。Japanese (no water obstacle) とあるので、ラーは逃げる際にワニのいる川を投げたが、イザナキが黄泉の国から逃げる際には水の障害物を使用していないことを指していると考えられる。*Custom and Myth* で展開されていた呪的逃走の研究をさらに展開させているとみることができるといえる。

Custom and Myth、*ritual and religion* の日本につい

ては断片的に触れられるのみで、まとまった記述はない。そのため大林太良は、ラングの研究が後世の国内外の日本神話研究に残した貢献は、「間接的には極めて大きいものがあつた」ものの、日本神話そのものには「あまり大きな関心をもつていなかった」と述べている⁽³²⁾。たしかにその通りかもしれないが、刊行されて間もないチェンバレンの古事記をさっそく活用し、世界的分布のなかに日本神話を置いていることを考えると、関心を持つていたとはいえるだろうし、チェンバレンのヨーロッパのアカデミズムに貢献したいという目的がラングの研究によって成し遂げられているともいえる。

③ アストン

チェンバレンの成果も取り込んだラングの研究を大いに参照し、日本神話研究に取り組んだのがアストンである。イギリスの外交官として来日し、日本研究者として活躍したアストンは一八九六年に日本書紀全巻の英訳である *Nihongi, chronicles of Japan from the earliest times to A. D. 697* を刊行する。彼は、古事記に比べて、日本書紀は漢文で記されており、中国の習俗や習慣に基づく記述が持ち込まれているため、日本的なものを汲み取ることが難しいという欠点を持つとしながらも、それで

も日本の神話や民俗、習慣、宗教を知る上で日本書紀の翻訳は研究者にとって必要であると考えていた。⁽³³⁾ アストンは積極的に日本の神話を他の地域の神話と比較しているが、その態度はチェンバレンが言語学者として謙抑的に語注に徹し、ほとんど神話の解釈や神話学的知見を入れなかったことと対照的である。その背景には、神話学への関心があり、ヨーロッパの神話学に貢献したいという意識があったのではないだろうか。

そのアストンがもつとも影響を受けていたのは、前述のラングのようである。ラングの *Custom and Myth* や *Myth, ritual and religion* を参照しながら、日本の神話を比較的に検討している部分について確認しておきたい。

まず天地のはじまりで、アメノミナカヌシに次いで登場するムスヒの神について、抽象的な観念（ムスビ）が擬人化する例は、未開の神話でも珍しくないことを *Myth, ritual and religion* のポリネシアの神話（サモア）に言及しながら述べる。⁽³⁴⁾ そして、日本書紀の「天地がまだそれほど離れていなかった時に」という天地分離についての記述については、ニュージーランドのマオリのランギとパパの神話（*Custom and Myth*）を参照している。⁽³⁵⁾

イザナキの黄泉の国訪問の神話が、もつとも比較的观点が多

い。ヨモツヘガイに関しては、ギリシャ神話のペルセポネが冥界の神ハデスに連れ去られた際の話やインドの「ウパニシャッド」のヤマとヤミの話と似ていることを述べつつ（*Custom and Myth*）、インドの地下世界の神の名ヤマと日本の冥界「ヨミ」が似ていることにも注意を払っている。イザナキがクシなどものを投げたり剣を振り回したりしながら逃げる箇所には、*Custom and Myth* でラングが日本神話に言及した箇所を挙げながら、「民俗学者なら、この追跡にすぐ気がつくだろう」と述べ他地域にもある呪的逃走の話であることを示唆する。⁽³⁶⁾

ツクヨミがウケモチを殺害し、その死体から作物が誕生したとする死体化生神話については、中国の盤古神話などの比較がすでになされていることを述べ、擬人化されたものの断片から世界が作られていくという考え方が、エジプト、イロコイ、ギリシャ、インド・アリアなどにもみられるものであると論じる（*Myth, ritual and religion*）。⁽³⁷⁾

山幸彦がトヨタマビメの課した「見るな禁」を破ったため、夫婦別れとなる話については、インドやマオリなどにもみられる花嫁や花婿が神秘的なルールに反した結果、姿を消すことになる話を引いている（*Custom and Myth*）。⁽³⁸⁾

アストンは、ほかにタイラーやジョン・オニールの名を出

したりもしているが、ラングほど繰り返し言及している研究者はなく、神話の部分に関してはいたるところでラングを参照し、大きな影響を受けていたことがわかる。

ラングに依拠しないものとしては、ヒルコを流す話がアッカドの神話やヘブライ語聖書のモーセの話と似ること。⁽³⁹⁾ ヤマトノオロチ神話がペルセウスとアンドロメダの神話と似ることなどが述べられている。⁽⁴⁰⁾

この *Nilonga* を出版してまもない一八九九年に、アストンはイギリスでも最古参の民俗学の雑誌 *Folklore* に (*Japanese Myth*) と題する論文を発表している。論文としては長く、三〇頁以上あるものだ。三部に分かれており、一部は *The Sacred Books of Japan* と題され、古事記や日本書紀など、神道に関する資料についての紹介が述べられる。二部は *The Mythical Narrative*、すなわち神話的な語りについて古事記にもつきながら、ときに日本書紀のエピソードも交えつつ、解釈的に紹介していく。そして最後に *The Place of Shinto in The Science of Religion* と題されており、宗教学における神道の位置づけが論じられる。

もっとも長く割かれているのが神話の紹介であり、わかりやすく日本神話の概要が記され、その際に他地域の神話との比較

が行われる。アメノスボコとポリネシアのマウイの釣り針やヒルコとモーセ、ラングのヨモツヘグイ解釈への言及、三貴子誕生と盤古神話、スサノオとペルセウスなどなど日本書紀の注で述べられていたことが本文のなかで説明されていく。

ほかには、次のような点にアストンが着目している。アマテラスが最高神であることと卑弥呼の存在に関連性がある可能性があること。高天原でのスサノオの乱暴の内容と大祓の祝詞の天津罪が類似していること。天の岩屋の前での祭儀は神道の儀礼と関わりがあること。コノハナノサクヤヒメの産屋での出産が日本の産屋儀礼の存在から説明されること。これらの問題関心は神話を古代や未開の習俗、習慣から理解しようとするラングの立場に近いものといえる。

その上でアストンは神道の神について論じる。本居宣長の神の語源説やタイラーの『原始文化』にみるアニミズム論などを参照しながら、人格化している神、自然に宿る神、物に宿る神、そして天皇、死者、靈魂との関係などとともに日本の神がどのようなものであるかを論じる。明確な結論めいたものはいくつかがないが、アストンがどのような宗教学の理論、神話学の立場に近かったかをよく示す内容となっている。また、*Folklore* という今も続く民俗学の専門誌に日本の神話、歴史、神道につい

ての紹介を学術的な議論も踏まえながら執筆していることは、彼の日本学者としてアカデミズムに貢献しようとする意図が感じられる。日本書紀の翻訳の目的と通じるものであろう。

③ フローレンツ

東京帝国大学文科科大学で言語学、ドイツ語学、ドイツ文学を教えていたカール・フローレンツは、日本文学の研究も進め、一九〇一年に日本書紀の巻一、巻二、いわゆる神代巻の翻訳である *Japanische Mythologie: Nihongi "Zeitalter der Götter"* を刊行している⁽³³⁾。のちに彼はドイツに帰国し、その *Quellen der Religionsgeschichte* という宗教史の資料集シリーズの第七巻第九輯として *Die historischen Quellen der Shinto-Religion* を刊行する⁽³⁴⁾。神道資料として、古事記、日本書紀、古語拾遺の神代を中心とした訳となっている。 *Die historischen Quellen der Shinto-Religion* は、日本研究者向けでないこともあり、注も比較的簡易なものとなっている。

フローレンツの研究を知る上で重要となるのは、 *Japanische Mythologie* であろう。フローレンツと比較神話学との関わりについては、すでに他所で論じているため⁽³⁵⁾、ここではその概略を中心に紹介するにとどめたい。

フローレンツは、スサノオについて嵐の神であると述べるなど、全体としてマックス・ミュラーの自然神話学の影響が強いことが先行研究でもすでに述べられている⁽³⁶⁾。加えて、アストンの *Nihongi* がかなり参照していたことがうかがえ、注には、アストンの注を引いているところが多く見られる。比較神話学的な部分でいうと、たしかにマックス・ミュラーの影響もあるが、アストンと同様にラングの研究を引く部分も多い。イザナキの黄泉の国からの逃走はサモアの神話と、山幸彦が釣り針をなくした際に、シオッチが助ける話は、北米のアルゴンキン族の神話と比較される (*Custom and Myth*)。井戸に投影される山幸彦の姿がきっかけとなってトヨタマビメと出会う話は、スコットランドの話やマダガスカルの話などとの類似を指摘する (*Custom and Myth*)⁽³⁷⁾。そして山幸彦とトヨタマビメの「見るな」の禁を破ったことによる別れについては、浦島太郎も禁じられた箱を開けている点で同じであると述べ、アストンと同様に *Cupid, Psyche, and The SUN-FROG (Custom and Myth)* の章で述べられているような禁忌を破ることによる夫婦の別れの神話の一つであるとした⁽³⁸⁾。

彼の創見としては、「天の浮橋」が虹を示す可能性があるとされたことが挙げられる。天と人間が暮らす世界との間にかかる

橋は、北欧神話でビフレスト（ビルレストとも）といい、虹である（と解釈されている）。そのビフレストを参考にした解釈である。⁽³⁰⁾この説については、のちにアストンなどほかの研究者も賛意を示し、⁽³¹⁾広く受け入れられていく。もちろん「天の浮橋」を虹とするのは、古代日本において虹が凶兆も示していたとされることから、異論もあるだろう。しかし、一九五九年に公開された映画『日本誕生』（東宝）では、イザナキとイザナミは虹の橋を渡ってオノコロ島へと向かう。フローレンツの比較研究が日本における「天の浮橋」のヴィジュアルイメージに影響を及ぼした例といえよう。

四、日本神話ほどの神話と比較されてきたのか

では、ここでこれまで取り上げてきた研究・翻訳を振り返り、日本神話がどの地域の神話と比較されてきたのかを神話の流れに従ってまとめておきたい。

- ① 天地の分離：ポリネシア（サモア、ニュージーランド・マオリ）
- ② 天の浮橋：北欧
- ③ アメノヌボコによる島の生成：ポリネシア

- ④ イザナキとイザナミの柱を回る結婚：インドネシアのミナハサ
- ⑤ ヒルコを流す：アツカド、ヘブライ語聖書
- ⑥ イザナキの黄泉の国訪問：ギリシヤ
- ⑦ ヨモツヘグイ：ポリネシア（ニュージーランド）、ギリシヤ、インド
- ⑧ 黄泉の国からの逃走（呪的逃走）：エジプト、ギリシヤ、イタリア、ロシア、ゲール、ズールー、フィンランド、サモア、中国
- ⑨ 三貴子誕生：中国、エジプト、イロコイ、ギリシヤ、インド、アリア
- ⑩ 天の安河：中国
- ⑪ 天の服織女：中国
- ⑫ ヤマトノオロチ退治：ギリシヤ
- ⑬ オオクニヌシとネスミ：ギリシヤ
- ⑭ 山幸彦とシオツチ：北米
- ⑮ 山幸彦とトヨタマビメの井戸での出会い：スコットランド、マダガスカル
- ⑯ 釣り針をきっかけとした山幸彦とトヨタマビメの結婚：ポリネシア（ハワイ）
- ⑰ 禁忌破りと山幸彦とトヨタマビメの別れ：インド、ポリネシ

ア (ニュージーランド)

一八七七年のタイラーによる講演から一九〇一年のフロレンツの翻訳までの間、日本の神話は実にさまざまな地域の神話と並べられ、論じられてきたことがわかる。ギリシャ神話が多いうようにも見えるが、「このような話はギリシャにもある」といった触れられ方である。内容的に彼らの関心を引いたのはニュージーランドやハワイなどポリネシアの神話との比較であつたようだ。チェンバレンに顕著であるように、中国については神話への影響関係が想定されているが、ポリネシアも、もちろんギリシャも日本神話の起源、成り立ちに関わる議論には展開していない。

他方、一八九九年、日本における神話学の端緒となつた高山樗牛の論文は、スサノオとインドのインドラとの類似、さらに日本神話とポリネシアの神話との類似を指摘していた³³⁾。そしてその類似は、「インド・アリアン人」からヴェーダ神話を受容したポリネシア人と日本の「天孫民族」の祖先が接触していたことによる類似であると論じていた。ポリネシアの神話は、日本神話とインドのヴェーダ神話をつなぐ役割を持つものとされていたのだ。樗牛の論文を受けて展開された姉崎正治と高木敏

雄による「スサノヲ論争」では、この日本神話起源論は取り上げられず、議論の焦点はスサノオ嵐神論と日本神話の研究方法に当てられた。そのため樗牛の起源論はそれほど注目されていない。しかし、海外の研究状況を踏まえてあらためて振り返ると、樗牛論文の特異性が浮かび上がるように思われる³⁴⁾。彼らの研究と日本の初期の神話学者たちの接続については、稿をあらためて考えてみたい。

五、おわりに

二〇世紀にはいると、チェンバレン、アストン、フロレンツらの翻訳を活用し、日本の神話は多様な観点から比較の俎上に上げられていく。たとえば一九〇八年には、アメリカ人類学のロバート・H・ローウィ (Robert Heinrich Lowie、一八八三—一九五七) が論文「The Test-Theme in North American Mythology」³⁵⁾、チェンバレンの古事記とフロレンツの日本書紀 (なぜかアストンの名は参考文献にはない) を参照しつつ、マヤ神話の英雄に与えられる試練が日本神話のオオクニヌシがスサノオに与えられる試練と似ていることが述べられる³⁶⁾。それは、『ポボル・ヴフ』の双子の神ファンアプーとイシユバランケーが闇の館や

劍の館、寒い館、火の館に入れられるという試練とオオクニヌシがササノオによって蛇やムカデ、蜂の部屋に入れられる試練のことである。ローウィイは、これらのような類似をもつて、北米の神話に日本の神話が影響を与えた可能性や共通のルーツを求めることは難しいと考えている。しかし北米の神話の「試練」モチーフを考える際に、日本も視野に入れている点は興味深い。というのも、時代が下り、二十世紀を代表する神話学者の一人レヴィ＝ストロース (Claude Lévi-Strauss、一九〇八～二〇〇九) もまた、南北アメリカ大陸の膨大な神話を分析する中に、日本神話を取り上げているからである。彼は「泣き虫の赤ん坊」テーマの分析の際に、アストンの *Nihongi* を参照し、ササノオが大人になっても泣きわめいていた神話を南北アメリカ大陸の神話と比較した。彼の場合はローウィイとは異なり、類似の理由を旧石器時代の文化の層を日本神話とアメリカ大陸の神話が共有し、ともに利用しているからではないかと論じていた。⁽⁵⁵⁾

日本を専門とする研究者であれば、古事記や日本書紀やその研究資料に直接あたり、研究することが可能だ。しかしローウィイやレヴィ＝ストロースのように南北アメリカ大陸の神話を論じる際に日本神話も視野に入れるといった広い視野による研究は、翻訳なくしては不可能であっただろう。

話を20世紀初頭に戻そう。一九二〇年代になると、日本を含めヨーロッパの各国をファシズム運動が席卷し、ナシヨナリズムが盛り上がりつつあった。国際情勢は不安定になり、日本を取り巻く状況も変わる。筆者は、以前ファシズム期（一九二〇年から一九四五年）の海外における日本神話研究について、イギリス、アメリカ、フランス、ドイツ、オーストリアを対象に分析したことがある。⁽⁵⁶⁾ 本稿で二〇世紀初頭までの研究、翻訳を検討したことで、あらためて一九二〇年代以降に、日本と日本神話への関心やまなざしが、それぞれの研究者の暮らす国と日本との国際関係の変化のなかで変質していったことがわかった。たとえばローウィイのように北米の神話と日本の神話を比較していく研究は、戦後のレヴィ＝ストロースまでほとんど行われていないのだ。チエンバレンやアストンを輩出したイギリスでは、ファシズム期にはまったくといってよいほど日本神話の研究は行われなかった。その一方で北欧神話（ゲルマン神話）と日本神話の比較は、以前はフローレンツによるビフレストと天の浮橋くらいであったが、ファシズム期には、アレクサンダー・スラヴィク (Alexander Slawik、一九〇〇～一九九七) のように日本とゲルマン神話の関係を集中的に論じる研究者が登場する。彼は日独防共協定が結ばれた一九三六年に代表作となる論

文 *Kultische Geheimbunde der Japaner und Germanen* (「日本とゲルマンの祭祀秘密結社」) を執筆している。⁽¹⁷⁾ そのなかで彼はスサノオと北欧神話のオーディンの神話の比較や男性結社の儀礼の比較などを積極的に行っていた。⁽¹⁸⁾

一九四五年以降、海外における日本神話研究はどのようなようになっていったのだろうか。翻訳についていえば、古事記に関してはドイツ語、フランス語、イタリア語、ポーランド語、ロシア語、中国語、韓国語、シンハリ語などさまざまな言語に訳されてきた。英語、ドイツ語、イタリア語は複数にわたって訳されている。こうした新たな翻訳の存在は神話研究に何をもたらしたのだろうか。神話学の展開や日本の神話研究との関りも視野に入れながら、引き続き検討をしていきたい。

注

- (1) 明治期の日本における神話学の展開については、平藤喜久子『神話学と日本の神々』弘文堂、二〇〇四年、「第一章 日本神話の比較神話学的研究の歴史」等で論じている。
- (2) 古事記の翻訳については、平藤喜久子「外国人が見た古事記」『國學院大學研究開発推進機構紀要』第五号、二〇一三年三月、九二(三三)～七八(四七)がある。日本書紀の翻訳については、平藤喜久子「初

期ジャパノロジストと日本書紀の翻訳」山下久夫、斎藤英喜編『日本書紀二二〇〇年史を問う』思文閣出版、二〇二〇年、三三九～三六二頁がある。

(3) 一九世紀以前の日本神話の状況については、山田仁史が「シーボルトと19世紀の日本神話研究」国立歴史民俗博物館(編)『シーボルトが紹介したかった日本・欧米における日本関連コレクションを使った日本研究・日本展示を進めるために』2015年3月25～33頁)で論じている。そこにはケンネルやシーボルト、テイチング、クラブロートの名が日本神話の紹介者として挙げられている。

(4) アニミズム論の概要と展開については平藤喜久子「アニミズム」月本昭男編『宗教の誕生』山川出版社、二〇一七年、三三二～四八頁参照。

(5) Edward B. Tylor. *Primitive Culture*, voll. London : K. Murray, 1871, p.264.

(6) Edward B. Tylor. 'Remarks on Japanese Mythology', in *The Journal of the Anthropological Institute of Great Britain and Ireland*, Vol.6 (1877), pp. 55-60.

(7) 大林太良「一九世紀ヨーロッパ学者の日本神話研究」『一橋論叢』六六、一九七二年、二四八～二六四頁。

(8) Tylor. *op.cit.*, p.55

(9) スサノヲ論争については、平藤二〇〇四「前掲注1参照」。

(10) Joseph Campbell. *The Masks of God: Primitive Mythology*, London : Secker & Warburg, 1959, revised in 2018 (e-book), p.53.

(11) Adolf Bastian. *Reisen Im Indischen Archipel, Singapore, Batavia, Manila Und Japan*, Jena : Hermann Costenoble, 1869, pp300-483.

(12) Adolf Bastian. *Die heilige Sage der Polynester : Kosmogonie und Theologie*, Leipzig : Brockhaus, 1881.

(13) Isaac Titsingh. *Nippon o dat tsi van, ou annales des empereurs du*

- Japan. Accompagné de notes, et précédé d'un aperçu de l'histoire mythologique du Japon, par Julius Klapproth.* Paris : Printed for the Oriental Translation Fund of Great Britain and Ireland, 1834.
- (14) 大林、前掲注、二二五頁。
- (15) 平藤、前掲注、千々和到、平藤喜久子、福島直之、石井敦、星野靖二「新出のB・Hチェンバレン、E・B・タイラー宛書状の紹介と検討」『國學院大學研究開発推進機構紀要』第三号、二〇一二年三月、一六六(四五)～一三三(七八)頁など。
- (16) 平藤、前掲注、二(二〇一〇年)「三三九—三六二頁、平藤喜久子「ノアン・ユ・ロビ」日本神話」『学習院大学国語国文学会誌』第四九号、二〇〇六年三月三四～四六頁。
- (17) B.H. Chamberlain, *Kojiki, or 'Records of Ancient Matters'*, Second Edition, Kobe : J.L. Thompson & Co. 1932, pp. ii-iii.
- (18) *Ibid.*, p. lxxxix
- (19) *Ibid.*, p. xc
- (20) *Ibid.*, p. lxi
- (21) *Ibid.*, p. lxi
- (22) *Ibid.*, p. lxxvi
- (23) Gustav Heldt, *Kojiki*, Columbia University Press, 2014.
- (24) *Ibid.*, p.8.
- (25) Chamberlain, *op. cit.*, pp. xcii-xciv
- (26) *Ibid.*, p. xcvi
- (27) Andrew Lang, *Custom and Myth*, Longmans, Green and co. 1884, p.93
- の脚注に「Ko ti ki, p.36, 37, 38」。この箇所は、いわゆる呪的逃走モチーフについて論じており、黄泉の国の醜い女性が主人公を追いかけるが主人公が髪飾りを投げ捨てるに葡萄に変わり、その葡萄を女性が食入っている間に逃げたと記されている。チェンバレンの古事記の三二六頁は
- (28) Hyacinthe de Charancey, *Une légende Cosmogonique*, Le Havre : Imprimerie Pelletier, 1884
- (29) Andrew Lang, *Myth, Ritual and Religion*, vol.1, London : Longmans, Green and Co. 1887, p.182
- (30) *Ibid.*, p.277
- (31) Andrew Lang, *Myth, Ritual and Religion*, vol.2, London : Longmans, Green and Co. 1887, p.322
- (32) 大林、前掲注、二二八頁。
- (33) William George Aston, *Nihongi, chronicles of Japan from the earliest times to A.D. 697*, London : The Japan Society, p. xvi
- (34) *Ibid.*, p.5.
- (35) *Ibid.*, p.18.
- (36) *Ibid.*, p.25.
- (37) *Ibid.*, p.33.
- (38) *Ibid.*, p.95.
- (39) *Ibid.*, p.15.
- (40) *Ibid.*, p.53.
- (41) W. G. Aston, 'Japanese Myth, Folklore', Sep. 1899, Vol. 10, No.3 (Sep. 1899), pp. 294-324.
- (42) 平藤、前掲注、三三〇～三三五頁。
- (43) Karl Florenz, *Japanische Mythologie : Nihongi "Zeitalter der Götter"*, Tokyo : Hobunsha, 1901.
- (44) Karl Florenz, *Die historischen Quellen der Shinto-Religion*, Göttingen : Vandenhoeck & Ruprecht, 1919 (Quellen der Religionsgeschichte:

- (45) Gruppe 9, Bd.7).
平藤 前掲注16、三五三—三五八頁。
- (46) Michael Wachutka, *Historical Reality or Metaphoric Expression?* Lit Verlag, 2002. 佐藤マサ子「カール・フローレンツの日本研究」春秋社、一九九五年。
- (47) Florenz, 1901, p.51.
- (48) *Ibid.*, p.219.
- (49) *Ibid.*, p.224.
- (50) *Ibid.*, p.13.
- (51) William George Aston, *Shinto: The Way of Gods*, London: Longmans, Green, 1905, p.87.
- (52) 高山林次郎(樗牛)「古事記神代卷の神話及歴史」『中央公論』第一四卷第三号、一八九九年、七—一七頁。
- (53) 高山樗牛論文については、下記で植民地主義との関わりから論じている。平藤喜久子「日本における神話学の発生と高山樗牛—日本主義との関わりを中心に」『國學院大學紀要』第四三卷、二〇〇五年、一四—一五六頁。
- (54) Robert H. Lowie, 'The Test-Theme in North American Mythology', *The Journal of American Folklore*, Vol. 21, No. 81 (Apr. - Sep. 1908), pp. 97-148.
- (55) Claude Lévi-Strauss, *Du miel aux cendres (Mythologique2)*, Paris: Librairie Plon, 1966, p.327.
- (56) 平藤喜久子「昭和前期の海外における日本神話研究—ファシズム期の視点から—」國學院大學研究開発推進センター編・阪本是丸責任編集『昭和前期の神道と社会』弘文堂、二〇一六年、五一—五二九頁。
- (57) Alexander Slawik, 'Kultische Geheimbünde der Japaner und Germanen', *Wiener beiträge zur kulturgeschichte und linguistik*, vol. 4, p.675-763. Wien 翻訳は、アレクサンダー・スラウイク著、住谷一彦、クライナー・ヨーゼフ訳『日本文化の古層』未來社、一九八四年、四三—一五八頁。
- (58) 平藤喜久子「第1章 ファシズム期の神話学と『青年結社』平藤編『ファシズムと聖なるもの』古代的なるもの」北海道大学出版会、二〇二〇年、二—二三頁。